

岡崎久彦著「小村寿太郎とその時代」PHP 研究所 2010年1月11日刊を読む

いまは日本の力は微弱であるがあと10年たてば

1. 日本では流血を見ることなく封建主義の支配者が倒された。革命の前に、もつぱら愛国的な動機から多くの大名たちが辞任し領土を引き渡した。
2. 領主への忠誠心は持ち続けていたがそれよりも愛国心のほうが強かったので、領主がその地位を辞したときは残念というよりむしろ嬉しかった。貢進性(こうしんせい)は全員寄宿生活をしていたが、小村だけでなく彼らの志気は極めて高かった。それぞれの道を代表しているという責任感もあり、また、近代日本を背負って立つ気概もあり、全員規則正しい生活をして東京の市街の空気に染まることなく大いに学び、大いに論じ、和漢洋書を読破して深更に至り、誰も彼もが他日有用の人材になろうとして切磋琢磨したという。 P19.20
3. ある時期 2人とも眼病を患い、医者から夜間の読書をやめるように言われた。(下宿の同室の)金子は、将来外交官になるつもりだから、夜は外出して社交を学ぼうとしたが小村はつき合わない。夜、金子が社交から帰ると、一人天井を眺めて黙想をしている。そして昼間読んだ本を夜間、頭の中で反芻(はんすう)して、瞑想にふけているのだと答えたという。小村の英語力は抜群であったという。 P23.24
4. 読書と思索だけに時間を過ごした。 P25
5. 日本の武士の道徳は寡黙(かもく)、不言実行、一言然諾(いちごんぜんたく)を重んじた。世の毀誉褒貶(きよほうへん)などは意とするに足らず。 P26
6. 度胸を支えるものとして信念がなければならない。封建時代の武士が高い身分でありながら質素な生活に堪え、一高の生徒が幣衣破帽を恥じなかったのは自らの思想が高踏的であるという誇りがあるからである。さねに国事しか念頭になれば貧乏の恥も忘れられる。 P30

- 2010年2月23日 林明夫記 -